

(様式1)

大学院派遣研修報告書

所属校	福生市立福生第二中学校	氏名	清水 宏美
派遣大学院	東京学芸大学大学院	研究科 専攻・コース	大学院教育学研究科 音楽教育専攻 音楽教育分野
研究テーマ	中学校における「日本の音楽」の指導 －「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を踏まえて－		

I 研究の概要

1 研究の目的

研究テーマに関する研究目的は、以下の通りである。

- 1) 中学校における「日本の音楽」の指導の意義や位置付けを明らかにする。
- 2) 「日本の音楽」を学ぶために必要な「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」について包括的に把握し、考察する。
- 3) 中学校の音楽の授業で「日本の音楽」を学ぶため、中学生にとらえさせたい「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」の指導内容を明らかにする。
- 4) 中学校における「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を踏まえた指導法を研究し、中学校における「日本の音楽」の指導モデルを提示する。

2 研究の内容、方法、成果

研究の内容、方法、成果は、以下の通りである。(図や表については、別紙資料を参照のこと)

第1章では、中学生が、音楽の授業で「日本の音楽」を学ぶことの意味を、今の中学生の発達段階と音楽とのかかわりから明らかにした。それに続いて、①中学校音楽科として、「音楽の授業」の在り方、②「日本の音楽」指導の意義や位置づけについて、考察し、授業創りの構想を下記の①②のように明確化した。

① 中学校における「音楽の授業」の在り方について、以下4つの図を構築し、考察した。

- 第1節 2の<中学生の発達段階を考えた授業創りに大切な5つの要素>
- 第2節 1の<中学校音楽科教育の学習構造図>
- 第2節 2の<中学校音楽科における学力構造図>
- 第2節 2の<中学校学習指導要領指導内容一覧図>

② 「日本の音楽を形づくる諸要素や特性」を踏まえて、<今の中学生が「日本の音楽」を学ぶ意義>について、以下の5つにまとめた。

- (1) 自国文化の尊重
- (2) 音楽的視野の広がり
- (3) 自分の表現力の向上
- (4) アイデンティティの確立
- (5) 新しい音楽創造への可能性

その上で、中学校における「日本の音楽の授業構想のモデル」図から、<中学校における「日本の音楽」の授業構想らせん図>をまとめた。

第2章では、「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を把握し、指導する重要性から、<「日本の

音楽を形づくる諸要素・特性」を総合把握するための「日本の音楽」の指導内容関係図>を考案した。関係図を導くために研究した内容は、以下の2点である。

- ① 先行研究に基づいて「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」と「日本の音楽」の用語について包括的に分類、提示し、説明した。
- ② 学習指導要領の5つの側面（情意的・構造的・感性的・文化的・技能的側面）を柱とし、第1節2の「日本の音楽を形づくる諸要素や特性」を踏まえたく中学校における「日本の音楽」の学習構造図>を作成した。

そして、これまでの自らの実践授業を中学校学習指導要領の内容と照らし合わせながら、<中学生にとらえさせたい「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」一覧表>を作成した。

第3章では、第1節1において、中学校における<「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」に焦点を当てた授業実践構想図>を基にして、次の3つの分析視点に基づいて、【4つの領域】の実践授業を分析し、検証した。

- ① 主題である「日本の音楽を形づくる諸要素や特性」を踏まえ、【指導内容】が明確であるか、授業案に明記して検証する。
- ② 「日本の音楽」の実践授業において、上記の指導内容が、音楽の学力として生徒に身に付くように、「日本の音楽」の【学習オブジェクト】を板書したり、学習カードに取り入れたりするなどの工夫をして検証する。
- ③ 実践授業の研究方法は、「日本の音楽」における伝統的な学習方法を中心とした【指導法】で検証する。

研究の【4つの領域】を扱った検証授業から、以下の4点の生徒の変容が見られた。

- ① 中学校の生徒が、「日本の音楽」を味わい、表現する場合、「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」をとらえながら、「日本の音楽」の本質をとらえて味わうことができるようになった。
- ② 「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」の幾つかをとらえるようになったことで、自国文化のよさを再認識するとともに、日本の音楽や文化に愛着や誇りをもつことにつながった。
- ③ 自国文化を再認識することで、もう一度他の音楽文化も見つめ直すことができ、そのよさや固有の価値を認められるようになった。
- ④ 「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を意識して、感受・認知したことで、自分の音楽観のよりどころを得て、日本の音楽や文化を堂々と表現できるようになった。

つまり、「日本の音楽」の指導において、「様々な声」や「和楽器」を通じた表現活動や「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を認知したり、感受したりする音楽学習、鑑賞活動が必要であることが検証されたのである。そして、実践授業を通して、<「日本の音楽の諸要素・特性」を生かした授業構築図>を作成することができた。

第4章では、中学校における「日本の音楽」の指導に効果的な指導法を開発し、その有効性を明らかにした。以下の6つの項目について、指導法上の提案をした。

- ① 【口伝】による<模倣学習>と<観察学習>を基盤とした中学校における「日本の音楽」学習習得オブジェクト
- ② 【唱歌】の活用
- ③ 「様々な声」「和楽器」に応じた【楽譜】の活用
- ④ 日本人の自然観に基づく<象徴技法>の活用
- ⑤ <指揮者なし>、<音頭中心>の学習形態による指導
- ⑥ <礼儀・作法>、<道>を重視した授業構成

そして、「日本の音楽」の授業における生徒の主体的な学びやその成果を、評価するシステムとして、<「日本の音楽」指導に有効な「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を踏まえた授業オブジェクト図>を開発した。

その開発に当たっては、本研究の過程で構築した、以下5つの図や表を活用した。これらの全体図や表をさらに第1章 第3節の「日本の音楽の授業構想モデル」の柱である「出会い・活動・内容の深まり・価値付け」とも関連付けながら、作成したのである。

- 第1章 第3節の「日本の音楽の授業構想螺旋図」
- 第2章 第2節の「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を総合把握するための「日本の音楽」の指導内容関係図
- 第3章 第3節の「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」に焦点を当てた授業実践構想図
- 第3章 第3節の「日本の音楽の諸要素・特性を生かした授業構築図」
- 第4章 第1節の「日本の音楽」の学習オブジェクト図

以上の研究や実践を基にして、本研究では中学校における「日本の音楽」の指導、及び「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を踏まえた指導に関して、次の結論を得た。

- 1 「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」をとらえながら指導することは、「日本の音楽」のよさや本質を認知させる上で重要かつ有効である。
- 2 中学校における「日本の音楽」の指導に、「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を取り入れて包括的に指導することは、中学生にとって、「音楽を総合的にとらえる力」や「音楽的視野を広げる力」の学びにつなげる上で重要である。
- 3 「日本の音楽」の授業を実践する中で、【口伝】、【唱歌】、＜指揮者なし＞、＜音頭中心＞の学習形態、＜礼儀・作法＞、＜道＞を重視した授業形態などを取り入れて指導することは、生徒が「自分の表現力」や「聴取能力」を向上し、「新しい音楽創造力」や「仲間とのコミュニケーション能力」を身に付けたりする上で効果的である。
- 4 中学生にとって、「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を把握し、表現活動をするには、「自国文化を音・音楽で語れる力」の習得につながり、日本の文化に愛着や誇りを持ち、生涯にわたり継続して「日本の音楽」を愛好する心情を育成する上で重要である。
- 5 中学生にとって、「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」の認知や感受を通し、鑑賞活動をするには、「自国文化を言葉で語れる力」の習得につながり、「日本人としてのアイデンティティを価値付ける力」を養う上で、重要である。

総じて、「日本の音楽」指導に当たっては、「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を中核に据えることが大切であるという仮説が、今回の実践研究を通して検証されたものと自己評価している。

「日本の音楽」の指導の過程で、生徒がさまざまな感受をし、価値付けをする能力を高めることができたのは、その授業の中核に「諸要素と特性」の認知・感受が適性に位置付けられていたからである。それなしに、音楽の授業をしていたら、音楽の「学び」はなく、単なる音楽の「活動」になっていたであろう。

このことから「日本の音楽」のみならず、普段行なわれている音楽科のすべての授業において「諸要素・特性」を音楽授業の中核にすえることが根幹となるべきものであると、今考えている。「活動・内容」あつての「音楽の高まり」であり、「質のある音楽の授業」である。

3 今後の課題

本研究のまとめから、中学校における「日本の音楽」の指導に関してさらに今後の研究実践上の課題が見えてきた。以下に3つ挙げる。

- 中学校音楽科授業における、「様々な声」や「和楽器」の種目と「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」の指導内容との関連についての研究
- 中学校において「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」の指導内容を位置付けた具体的な年間指導計画の作成
- 小学校・中学校・高等学校との連携を踏まえながらの、「日本の音楽」の指導体系の研究

そのほかの私自身のこれからの課題は、世界の諸民族の音楽に関する視野の拡大と授業研究である。その上で、「日本の音楽」と「世界の諸民族の音楽」を関連付け、幅広く学ぶことのできる授業展開を構築することである。

II 学校等における研修成果の活用計画

1 所属校における研修成果の活用

- 大学院での研究成果を生かし、所属校における音楽教育の新たな展開に努める。
- 所属校の国際理解教育（国際交流）・文化的行事等に「日本の音楽」活動を取り入れ、リーダーとして、積極的に活躍する。

2 東京都における研修成果の活用

- 大学院派遣研修にかかわる研究成果、つまり中学校における「日本の音楽」の指導における伝統音楽の果たすべき役割や意義、今後の音楽教育の在り方などに対する考え方を校内・校外の研修会等において提案・発表し、批評を得るとともに、多くの音楽科の教師の指導上の参考に供する。
- 地域の中学校音楽の研修会や他県などの和楽器を含む「日本の音楽」の指導の研修会における指導講師として招へいされた折は、資料・情報を提供し、東京都の音楽教育全般への発展に資する。
- 平成18年度より実施される「東京教師道場」における指導・助言者として、東京都音楽科若手教員の育成とともに、音楽科授業研究を通して自己研修能力の向上を図る。

3 自身における研修成果の活用

- 大学院での研究は自分自身の今後のキャリアに活用する。つまり、勤務校における更なる実践を通し、「日本の音楽」「和楽器」の指導において、より具体的で生徒にとって理解しやすい指導法を構築する。
- これからの音楽教育の在り方を念頭に置いた、中学3年間の幅広い音楽活動を加味した学習指導計画、あるいは「日本の音楽」を中核に位置付けた学習指導計画などを立案する。また、それらを活用し、その後も実践成果を収めていく。
- このような研修を通じて学ぶ姿勢を研修終了後においても持続し、常に音楽教育に課題をもち、日々の授業において実践を積む教師でありたいと考える。そして、そのような研修の機会の素晴らしさを同僚にも伝えていきたい。

大学院派遣研修成果活用状況

所属校	立川市立立川第二中学校	氏名	清水 宏美
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	大学院教育学研究科 音楽教育専攻 音楽教育分野
研究主題	中学校における「日本の音楽」の指導 －「日本の音楽を形づくる諸要素・特性」を踏まえて－		

1	所属校での成果活用	<p>大学院研修終了後の「研修成果の活用計画」は、以下の2点であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 大学院での研究成果を生かし、所属校における音楽教育の新たな展開に努める。 ○ 所属校の音楽の授業・文化的行事等に「日本の音楽」活動を取り入れる。 <p>4月より、福生市の中学校から、立川市立立川第二中学校に異動し、大学院での研修成果を生かし、以下のように日常の音楽科における授業改善を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 従前の立川第二中学校音楽科の年間指導計画の見直しと共に、新しい教科書に対応した「平成18年度 立川第二中学校音楽科年間指導計画」3年間分を立案した。 ② 立川第二中学校生徒の実態を把握し、授業内容分析を行い、「音楽科」授業改善推進プランを作成した。 ③ 音楽科の評価における観点の明確化を図るために、立川第二中学校生徒用の「中学校音楽科における学力構造図」を作成し、生徒に説明、提示した。 ④ 毎時間の音楽科授業における指導内容の明確化・焦点化を図るため、生徒の目標設定を徹底させるために、「自己評価カード」を充実させ、授業活用をした。 ⑤ 早速、3年生の必修授業において、5月修学旅行前に「日本の三大芸能（能・文楽・歌舞伎）」の【B鑑賞】の授業と【A表現：器楽】の授業「三味線でさくらを奏でてみよう！」の関連を図った授業を実践した。
2	委員会・研修会での成果活用	<p>大学院研修終了後の「研修成果の活用計画」は、以下の3点であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 大学院派遣研修にかかわる研究成果、つまり中学校における「日本の音楽」の指導における伝統音楽の果たすべき役割や意義、今後の音楽教育の在り方などに対する考え方を校内・校外の研修会等において提案・発表し、批評を得るとともに、多くの音楽科の教師の指導上の参考に供する。 ○ 地域の中学校音楽の研修会や他県などの和楽器を含む「日本の音楽」の指導の研修会における指導講師として招へいされた折は、資料・情報を提供し、東京都の音楽教育全般への発展に資する。 ○ 平成18年度より実施される「東京教師道場」における指導助言者として、東京都音楽科若手教員の育成とともに、音楽科授業研究を通して自己研修能力の向上を図る。 <p>4月より、9月現在、大学院研修終了後の成果を生かして行った研究発表は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 東京都教職員研修 選択課題研修（音楽ⅡB）における「音楽科 題材構成の指導の充実－中学校音楽科での題材構成及びその評価の在り方と授業改善－」の講義・演習・実践発表を行った。（8月3日 木 東京都教職員研修センター） ② 立川市中学校音楽研究部会、夏季集中研修において、「今後の中学校音楽科における評価と授業改善」についての講義発表を行い、「三味線の基本的な奏法」を身に付け、「三味線の特徴ある奏法や音色を生かして、『さくらさくら』の伴奏を歌いながら、奏でてみよう！」についての実践授業演習を行った。（8月28日 全日研修講師）

	<p>③ 福生市立 A 中学校の校内研修において、「中学校音楽科授業研究と評価の在り方」について資料提供と発表を行った。(6月22日 木 福生市立 A 中学校)</p> <p>④ 東京教師道場における夏季集中研修において、「日本の音楽指導の意義とその可能性」と共に「箏の音色と奏法から生み出される雰囲気や特徴を感じ取ろう！」という題材で【A 表現：器楽】【B 鑑賞】の関連を図った研究模擬授業を実践発表と講義を行った。(8月30日 水 所属校)</p> <p>⑤ 北海道教育大学付属札幌中学校の先生が来校し、1年生と3年生の授業にて、「指導内容の焦点化を図った授業」の研究授業発表を行い、「日本の音楽指導」における資料・情報提供を行った。(7月6日 木 所属校)</p>
3 成 果 を 生 か し た 研 究 授 業 等	<p>4月より、9月現在、大学院研修終了後の成果を生かして行った研究授業は、以下の通りである。</p> <p>① 東京学芸大学にて、教職専門授業（塩原麻里助教授の講義授業）において、「中学校における『日本の音楽』指導」の実践研究授業を発表した。(6月7日 水 東京学芸大学)</p> <p>② 3年選択授業にて、「三味線の基本的な奏法」を身に付け、「三味線の特徴ある奏法や音色を生かして、『さくらさくら』の伴奏を歌いながら、奏でてみよう！」の授業を研究し、公開した。(7月8日 学校公開日 所属校)</p> <p>③ 北海道教育大学付属札幌中学校の先生が来校し、1年生と3年生の授業にて、「指導内容の焦点化を図った授業」の研究授業発表を行った。7月6日 木 所属校)</p>
4 今 後 の 活 用 計 画 等	<p>大学院研修終了後の「研修成果の活用計画」は、以下の2点であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 大学院での研究は自分自身の今後のキャリアに活用する。つまり、勤務校における更なる実践を通し、「日本の音楽」「和楽器」の指導において、より具体的で生徒にとって理解しやすい指導法を構築する。 ○ これからの音楽教育の在り方を念頭に置いた、中学3年間の幅広い音楽活動を加味した学習指導計画、あるいは「日本の音楽」を中核に位置付けた学習指導計画などを立案する。また、それらを活用し、その後も実践成果を収めていく。 <p>今後の成果の活用発表予定としては、以下の通りである。</p> <p>① 1月13日（土） 東洋音楽学会「公開シンポジウム『伝統文化の継承と発展—音楽教育の現場から—』」という演題で、イイノホールにて、小島美子先生・大熊信彦教科調査官・伊野義博先生・山内雅子先生とともに発表する。</p> <p>② 2月23日（金） 東京都中学校音楽研究部会 東京大会にて、東京都音楽プロジェクトチームとして研究した成果を発表。</p> <p>③ 3月9日（金） 立川市立立川第二中学校学習発表会にて、3年生選択や2年生選択授業の成果として、「和楽器を活用した授業発表」。</p> <p>今後の所属校での授業実践としては、以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 1月より、1年生の必修授業では、「箏の学習」、2年生の必修授業では、「箏の学習」と「尺八の学習」、2・3年生の選択の授業では、「和楽器合奏」や「雅楽の学習」に取り組みたいと考えている。 <p>今後も、以上のような研修や授業研究を通じて学ぶ姿勢を持続し、常に音楽教育に課題をもち、日々の授業において実践を積む教師でありたいと考える。</p> <p>そして、このような実践に結びつき、自分の教師指導力アップにつながる「大学院派遣研修」の機会の素晴らしさを同僚にも伝えていきたい。</p>